
モノ ～種馬になった男～

おっとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノ　ゝ　種馬になった男

【Nコード】

N 8 7 6 4 D

【作者名】

おっとり

【あらすじ】

馬の種付けを見て、モノは思った。「自分も種馬になりたい」と。全てに嫌気がさした、その次の朝、彼は一人の牡おすになっていた……。そして目の前に並ぶ裸の女達……。ぱふぱふする？『はい』『いいえ』……。モノが選択したのはもちろん……。

羨ましい仕事（前書き）

エロイからね、良い子は見ちゃだめ！

羨ましい仕事

額から浮き出た汗が、頬を伝い、アゴの先から雫となって落ちる。目で追うと、雫は下にいた女の乳房の上に落ち、そのなだらかな丘陵を滑り下りて視界から消えていった。女の息は荒い。物欲しげに瞳を潤ませつつ、静かに胸を上下させている。たまらず、モノは女の背中に腕をまわし、ほんのりと紅潮したその体にかぶりついた。柔らかい……そして、熱い……ベッドがきしむ音と、女が何やらあーだこーだ言っている声を遠くに聞きつつ、モノは仄暗い快樂の底へと沈んでいった……

それは、いつも通りの朝だった。まだ日も上がらぬ早朝、声を張り上げる目覚まし時計に起こされると、モノは眠い眼をこすりつつ身支度をし、食パンと牛乳だけの簡単な朝食を済ませて家を出た。自転車に跨って、十分ほどペダルをこぐと彼の職場である牧場、『シャーン・ダイン・スタリオン（SDS）』に到着する。この牧場にはたくさんの馬がいる。その馬達の世話をするのが彼の仕事だ。正直、彼はこの仕事が好きではなかった。競馬が好きだったので、何となく就職してみたのだが、実際、朝は早いし、馬の世話は臭いし、危ないし、重労働だ。しかも、ほぼ毎日同じことの繰り返し……モノは、牧場の仕事に嫌気がさしていた。

そんな彼の日課に、最近、もつと嫌になる仕事が増加された。馬達の繁殖期と言うことで、馬の種付けの補助を任されたのだ。この時期、SDSにはたくさんの繁殖牝馬はんしゅくひんばがやって来る。SDSは馬の中でも、特に種牝馬しゅひんばを多く管理しているので、それを目当てにやって来るのだ。特に人気なのは、現役時代たくさんのGイレースで優勝した『ブラックキング』だ。この繁殖期の間に、彼は百頭以上の牝馬を相手にしなくてはならない。一日一頭でも間に合わない人気ぶり……いわゆる『とっかえひっかえ』の状態なのだ。恋人も女友

達もないモノにとって、繁殖期が終わるまでのおよそ二ヶ月の間、そんな光景を見なくてはならないという状況は、苦痛以外の何ものでもなかった。

「羨ましいよな、こいつらは。」

牝馬の腰にのしかかって、その立派な馬体を揺らすブラックキングを見て、同僚の男は笑いながら言った。

「なんせ、こいつら種馬たねうまにタッチやあ、女を抱くことが仕事なんだから。そんな仕事なら、俺も是非やってみたいね。」

「まったくだぜ……」

種付けが終わったのか、二頭の馬は離れ、そして、ブラックキングはズシリとその場にしゃがみ込んだ。精を搾り出すという作業はなかなか大変なもので、多くの体力を必要とする。今日、もう三頭目だったので、さすがに疲れたのだろう……ブラックキングは荒い息を整えつつ、その円らな瞳でモノと同僚達を見ていた。モノには何だかその視線が、まるで「羨ましいだろ？」と自慢しているように感じられた。

「良いご身分だぜ……」

ペツと唾を吐いて、幸せな疲れに浸っているであろうブラックキングを、モノはただボーッと眺めていた……同じ牧場で働いているのに、片や女をとつかえひつかえ……片やそのお世話係……妙な悔しさを抱きつつ、モノはその日も単調な仕事を終え、家に帰るとすぐにベッドの上に横になった。

俺も種馬になりたい……

次の日……モノは静かな朝を迎えた。いつもは「起きろ！ 仕事に行け！」とやかましく怒鳴り散らす目覚まし時計が、今日に限っては何も言わない。故障でもしたのか？ だとすると、今は一体何時なのか？ モノはボーっとする頭で、遅刻にならないことを祈ると、ベッドに転がったまま目覚ましの置いてある辺りに手を這わせ

た。しかし、何の手応えもない……チツと舌打ちをすると、モノはもう一度、入念に手を這わせた。が、やはり手応えはない。いや、それどころか……

次第に頭がスッキリしてくると、彼は自分の身の周りの異常さに気が付いた。

「何じゃこりゃ……」

見ると、そこは彼の自宅ではなかった。ベッドこそ彼の物だが、しかし、周りは壁紙も張られていない木製の壁……そして、あたり一面に漂う草の匂い……

「馬房……？」

良く見ると、そこは確かに、彼の職場である牧場の馬房だった。ベッドと一緒に出勤してしまったのだろうか？ いや、重症の夢遊病患者でも、重いベッドごとこんな所に来るはずがない……しかし、そうすると、馬がいるべき馬房に、なぜ人間である自分がいなくてはいらないのか？ モノは完全に混乱してしまった。

「いつまで寝ている。早く起きて来い！」

その時、突然後から、低く張りのある声が響いた。驚いて振り返ると……モノはさらに驚いた。

「仕事の時間だぞ、早く出て来い。ノルマはまだまだ残ってるんだから。」

そこにいたのはブラックキングだった。それも、人の言葉を話している……「そうか！ これは夢か！」と、そう思っ、彼は自分の頬を思い切りつねってみた。しかし、痛い……痛すぎる……

「夢じゃないのか？」

「何だ、まだ寝ぼけてるのか？」

「寝ぼけてる？ お目めパッチリさ！ 何だこりゃ？ 一体何なんだ、このメルヘンな状況は！」

遂に頭にきて、モノはまくし立てるように一番の疑問をぶちまけた。しかし、モノの言葉を聞くと、ブラックキングは口を大きく開けて啞然としてしまった。

「まいったな……健忘症か？ お前らヒューマンの脳はややこしいからな……」

困ったように言うと、ブラックキングは、今度はモノの体をジロジロと見始めた。

「体に異常は無さそうだな。」

「ん？ ああ、健康そのものさ！」

「そうか……じゃあ、まあ良いか。仕事をしながら思い出していう、な？」

「訳の分からないことを言うな！」

「分かった、分かった……説明するから、とりあえず来い。」

ブラックキングはそう言って、モノにお尻を見せると、「付いて来い」と首で促した。モノはまだ頭の中がぐちゃぐちゃだったが、しかし、行けば何か分かるだろうと思い、とりあえず深呼吸をして心を落ち着かせると房を出た。

訳の分からない状況下にはあったが、しかし、それはいつも通りの通路だった。モノの最近の日課は、馬房から馬を出し、種付け用の場所に連れていくこと……ただ、今日は立場が逆。自分が房から連れ出されているのだ。そして、ブラックキングは昨日までモノがしていたように、彼を種付け用の場所に連れてきた。大きな、倉庫のような建物だった……

「この中がお前の職場だ……」

扉の所まで来ると、ブラックキングはモノの方を振り返って言った。

「まだ記憶は戻らないか？ お前は種牡人なんだ。これから、この中にいる繁殖牝人達に種付けをしてもらう。」

「しゅぼじん？ はんしょくひんじん？」

「まったく……要は、今から会わせる女どもを抱いて、妊娠させるのがお前の仕事だ。」

ブラックキングは面倒臭そうに言うと扉を開いた。モノはその後

を付いていく。が、その頭の中はさらにぐちゃぐちゃになってしまった。女を抱いて、妊娠させるのが仕事……それは、昨日、まさに自らが望んだことだった。しかし、それがあつまり実現されてしまう意味が分からなかった……

「おい、ぼさつとするな。こつちだ。」

建物の中は細かく部屋に分かれていた。廊下の両端にはたくさんの扉が並んでいる。そのうちの一室に、モノは連れてこられた。中に入って見ると、ベッドが一行に並んでいて、その一つ一つに女が一人ずつ寝転がっていた。するとその時、モノは急に、股間に圧迫感を覚えた。いや、正確には圧迫されているのではなく、膨れ上がる自分の肉体をズボンが押さえつけているのだ……女達は皆、裸だった……先ほどの、ブラックキングの言葉が思い出される。モノは、再度彼の方を振り返って見た。

「早く服を脱げ。まったく、ヒューマンってのは邪魔な物を身に付けすぎだ。」

溜息をつきながら、ブラックキングは言った。

モノはまだ分からなかった。なぜ、自分がこんな状況に置かれているのか？ 一体いつ、どこで、どのようにして？ しかし、分からないことだらけの中で、彼は一つだけ理解した。今、自分がすべきこと……

「ねえ、早く……」

服を脱いで、いくつかあるベッドのうちの一つを選んで、その前に立つと、女の手足がモノに絡み付いてきた。2つの体がベッドに吸い込まれる。モノはそれに逆らわず、女の体の上に覆いかぶさった。熱い脈とともに湧き上がる感情……それを咎めるものはもう何もなかった。

続く

羨ましい仕事（後書き）

大きいお友達の皆にはちょっと物足りなかったのでしょうか？
でも、続きます。

この小説は、春エロス2008にエントリーされた企画小説です。
企画の内容は公式サイトにて……

<http://haruero.ddo.jp/2008/>

簡単に言つと、エロイけど18禁じゃないんです。

隣のリデル

ムツと鼻をつく匂い……女の匂い……その中に含まれているであろう化学物質に頭をくすぐられて、モノは女に飛びつくと、その中に自らの一部を滑りこませた。声を上げる女の首に腕をまわし、乱暴に唇を重ね、そして、そのまま遮二無二体を揺さぶる……女の腕が背中にまわり、モノの体を引き寄せた。ぴったりと2つの体がくっ付くと、女の体温と鼓動が伝わってきた。トクトクと、それは少しずつピッチを上げていく。それと同時に、女の体が急速に強張り始める。背中を弓形に反らせながら、その体の中に包み込んだモノをグイグイと締め上げる。途端に、モノは体の内側で何かが弾けるような感覚に襲われた。頭の中が白くなって、体から力が抜ける……

「よし、少し休憩しろ。そしたら次だ。」

そう言つて、ブラックキングは、女に覆い被さったままのモノの体を引き剥がした……

結局その日、モノは五人の女をその腕の中に抱いた。その体に残る、女達の香りと感触を確かめると、モノは思わず笑ってしまった。そして、もう一度頬をつねってみる……やっぱり痛い……それは、紛れもない現実だったのだ。

「ご機嫌だな？ 何か良いことでもあったのかい？」

厩舎やうしやに戻ってきて、ニヤニヤしながら自分の房に入ろうとしていた時だった。不意に、モノは隣の房にいた男に話しかけられた。木製の壁一枚で仕切られた向こう側……モノが覗きこむと、そこにはモノの房と同じくベッドが一つあり、そして、その上には男が一人寝そべっていた。肩まで伸びた髪にアゴ髭……少し痩せた顔色の悪い男だった。

「女を抱くのが、そんなに楽しいか？」

「あんたも種牡人ってかい？ 楽しくない訳がないだろ。」

モノが言うと、男は頬のこけた顔に、フツと笑みを作って見せた。
「お前は新米のようだな……名前は？」

「俺か？ モノだ……」

「俺はリデル……モノ、一つ言っというてやるが、種牡人つてのはそう甘くないぞ。」

「なに？」

「フツ、直に分かるさ……」

リデルはそれだけ言うと、ゴロンと転がってモノに背中を向けてしまった。変な奴……ひょっとしたら、リデルは女嫌いなのかもしれない……モノはそう思った。それなら自分には大丈夫だ……モノは女は好きだった。あの香り、手や舌から伝わってくる感触、そして、それと一つになる快感……何も問題ない。モノはそう自分に言い聞かせると、自分もベッドの上にゴロンと転がった。

次の日、再びモノの元にブラックキングがやってきた。今日も、これから種付けが始まるのだ。

「それじゃ、これから女とやってくるぜ！」

モノは出る前に、隣の房のリデルに向かって言った。

「健闘を祈る……」

健闘するとも……モノはリデルの言葉に返事を返さず、胸を張って歩いた。朝の牧場の中を、軽快な足取りでズンズンと……そして昨日と同じ建物の前に到着した。柔らかく、暖かい快感が再び思い出される……入り口に立つただけで、モノの心臓は激しく高鳴った。
「やる気があつて結構なことだな……」

モノのズボンの膨らみを見て、ブラックキングはフンと鼻で笑ってから扉を開いた。種付け用の部屋まで続く廊下……「待ちきれない！」と、モノは服のボタンを外しながら歩いた。到着した時には、モノは既に全裸だった……いきり立つ自分の体を一瞥すると、モノは深呼吸を一つした。

「それじゃあ、早速始めるか。好きな女から抱いて良いぞ。」

部屋に入ると、ブラックキングが言った。好きな女から……昨日と同じように、それぞれベッドの上に寝転がる女達をモノは見た。しかし、どうも様子がおかしい……

「どうした？ もう始めて良いぞ？」

入り口の所で硬直したままのモノに向って、ブラックキングはもう一度言った。しかし、モノの顔は引きつっている……

「ブラックキング……これはちょっと、おかしくないか？」

女達を見ながらモノは聞いた。おかしい？ ブラックキングは首を傾げた。

「何がだ？」

「その、なんだ？ 俺はこういうアブノーマルな趣味はないんだ。昨日みたいな、可愛い子達が良いんだけど？」

そこに並んでいたのは、見た目の話をすれば、決して美人とは言えない女達だった。「どうせするならもつと『良い女』と……」と、モノは抗議しているのだが、しかし、ブラックキングは溜息をつくと、それを一蹴した。

「お前の好みなんぞ知るか。」

仕方なくブラックキングは、鼻先でグイグイとモノの背中を押し始めた。

「見た目なんぞ気にするな。とりあえず、お前はこの女達に種を付ければ良いんだ。」

そう言つて、モノをベッドの所まで追いやる……目の前に現れたのは五十歳ぐらいの、白髪の混じった女だった。それを確認すると、モノはブラックキングの方を振り返った。

「何で、こんなババアとしなきゃいけないんだよ！」

モノは、以前、友人といっしょに見たアダルトビデオのことを思い出した。『熟女パラダイス』と題されたそれを、友人は鼻の下を伸ばしながら観ていたが、しかし、モノにはまったく理解出来なかった……そんなモノに、友人は熟女の良さについて熱く語ったが、しかしモノは首を横に振ってから言った。

『ババアはごめんだぜ。』

「失礼なことを言うな。この繁殖牝人は、元棒高跳びの金メダリストで、血統もなかなかのものだ。そんな良血の牝人の相手に選んでもらえたんだから、光栄に思え。」

ブラックキングはそう言って、嫌がるモノの尻を思い切り蹴飛ばした。モノの体は吹き飛ばされ、宙を舞うとベッドの上に落下した。「おばさんで悪いけど、頑張ってちょうだいね。」

その瞬間、二本の腕が伸びてきてモノを捕まえた。そして、モノの意思を無視して、彼の首を強引に引き付ける……気が付いた時には、モノのすぐ目の前に初老の女の顔があり、そして、口の中にはヌラヌラとした何かが侵入していた。

「うわあああああ！」

手足をジタバタと動かして、モノは女から離れようとした。しかし、女の腕がしっかりと体に絡み付いているので、それは叶わない蛇のような二本の腕はモノの自由を奪いつつ、その体の上を這い回り、そして、太股を撫でながら脚の付け根にあるそれを捕まえた。柔らかい……

「あらあら……若いのに元気がないね。どれどれ、始める前に少し気持ち良くしてあげようかね……」

すっかり萎んでしまったモノのやる気を取り戻そうと、初老の女は手の中に捕まえたそれを弄んだ。モノの体を、ビリビリと電気が突きぬけた。そして、頭の中には後悔の念が溢れた……あの時、ちゃんと友人の話を聞いておけば良かった……熟女の楽しみ方を……「ぎゃあああああああああ！」

建物内に、モノの悲鳴がこだました……

その日の種付けを終え、リデルは自分のベッドでくつろいでいた。しかしその時、人がやってくる気配がしたので、彼は体を起した。

「モノ……今日の仕事は終わったのか？」

見ると、そこにいたのは種付から返ってきたモノだった。しかし、昨日と違ってその顔に笑顔はない。それどころか、うつむきかげんで、全体的にも生気が感じられない……

「大丈夫か？」

あまりのやつれように、リデルは思わず心配になって聞いた。モノはリデルの顔を見ると、ニツコリと、力なく微笑んだ。

「いや……大丈夫じゃない……」

「良い女は抱けなかったようだな……」

モノの頭の中を、今日抱いた女達の顔が走馬灯のように駆けめぐる……

「ああ、ババアにボディビルダー……元レスリング選手とやった時は、首がもげるかと思っただぜ……」

それだけ言くと、モノは自分の房に入り、倒れるようにベッドに横になった。恐ろしく疲れた……肉体的にも、精神的にも……

「甘くないだろ？」

リデルはモノの房を覗きこみながら言った。

「ああ……」

リデルの言っていたことが良く分かった……モノはそんなことを考えつつ、ゆっくりとまぶたを閉じた。

続く

隣のリデル（後書き）

本当は二十日になると同時に投稿したかったのですが
断れない飲み会に誘われ……
さらに酒によってTKO！

遅れましたが、第二話でした。

その日最後の女

種牡人になって数日が経った……二日目でトラウマになりそうな経験をしたが、それでも、モノは種牡人としての仕事を順調にこなしていた。可愛い娘を抱いて、色っぽい美女を抱いて、体重百キロ超の体に潰されそうになって……可愛い娘を抱いて、色っぽい美女を抱いて、元柔術家に締め殺されそうになって……紆余曲折あったが、しかし……

「まあ、時々死にそうになるけど、彼女達も抱いてみるとなかなか良かったりするもんだ。」

房と一緒に食事を取りながら、モノはリデルに言った。今日の朝食はBLTサンド……それを口に運びながら、リデルは笑った。

「そうか……お前は種牡人に向いているのかもしれない……」

「自分でもそう思うぜ。」

大きく口を開けて笑うと、モノはそのまま口の中にBLTサンドを押し込んだ。そろそろ、種付けが始まる時間だ……モノが口をもぐもぐさせていると、案の定、ブラックキングがモノを呼びにきた。「それじゃあ、俺は行くぜ。カワイ子ちゃんが待ってるからな。ブスかもしれないけど……」

「ああ、がんばれよ……」

「おうよ！　どんなブツサイクでも、俺がカワイ子ちゃんにしてやるぜ！　ハッハッハッ！」

自分の肩を抱きしめておどけて見せると、モノはブラックキングの後について、種付けに向かった。残されたりリデルはBLTサンドをパクパクと食べながら、その背中を見送る。

「それで良い、モノ……色んな女を楽しめ……『色んな女』をな……」

モノは最近、種付け用の部屋に入ってから、すぐに一番左のベッ

ドに向かうようにしている。以前のように、並んだ女達を一通り見るようなことはしない。一番左のベッドが最初……一番右のベッドが最後……モノは自分でそう決めていた。最初に女達を見ると、どうしても見た目の好みが出てしまう……そうすると、好みでない女の時に、その女に集中できなくなる。女のためにも、自分のためにもならない……そう考えて、モノは順番を運命に任せることにしたのである。

そして、本日四人目……モノは女を強く抱きしめながら、その中に自分の分身達を解き放った……くつと力が抜ける。
「終わったな。休憩して良いぞ……」

モノはいつものようにブラックキングに起されると、休憩用の椅子に腰掛けた。今日の相手は妖艶な熟女、マッスル・レディ、そばかすが可愛い少女、ぽっちゃりとした女……どの女も、モノはそれなりに楽しむことができた。そして、そのことを思うと、モノは少しだけ誇らしかった……

そして、次はいよいよ本日最後。どれどれ……どんな女だろうか？　モノはスタミナドリンクを飲みながら、一番右端にあるベッドの上を見た。すると、モノの視線はそこに吸い込まれた。ベッドの上では女が一人、ぽつんと座っている。別に何をするでもなく、体育座りのような体勢で、自分の膝小僧を見つめている。綺麗な、しかし、どこか儚げな女だった……

モノは息を呑んだ。女が一人、膝を抱きかかえてベッドの上に座っている……それだけの光景だったのだが、しかし、モノにはそれが、美術館に展示された素晴らしい絵画のように思えた。そして、気がつくともノは椅子から立ち上がり、フラリフラリと女の元に歩み寄っていた。そうせずにはいられなかった……

「ねえ……」

モノは、彼女に声をかけた。女の視線が、膝小僧からモノに移る。その二つの瞳に見つめられると、モノは急に緊張してしまった。良く考えてみれば、ここ数日、女とは体のやり取りだけで、ともに

言葉を交わしたことなく無かった。

「何です？」

女は、ジッとモノの目を見つめながら聞き返してきた。モノの鼓動が一気に高鳴る。彼はそれほど、女性と気軽に話せるタイプではないのだ。頭がパニックを起し、何と言って良いか分からなくなっ
てしまい……

「名前は？」

とりあえず、当たり障りのないことを聞いた。

「……ミライ。」

「そうか、ミライって言うんだ？」

「そう、ミライ……」

当たり障りのないことだったので、当然会話は続かなかった。しかし、それでもモノは、何とかして彼女と話をしたかった。何でも良い……話題を……モノはとにかく、思いつくまま口を開いた。

「何でここに？」

「繁殖牝人だから……」

「まあ、そうなんだけど……何で繁殖牝人に？」

それを聞くと、ミライは答えず、再び自分の膝小僧に視線を戻してしまった。まずいことでも聞いてしまったのだろうか？ モノはそう思うと、慌てて話題を変えようとした。が、変えるにしても、新しい話題が見つからない……

「あなたは？」

「え？」

モノが困っていると、逆にミライが口を開いた。

「何で種牝人なの？」

「それは……」

何で？ モノは考えた。自分が種牝人になった理由は……

「朝、目が覚めたら、なってた……」

「何それ？」

ミライは、モノの間抜けな解答を聞くと、思わずプツと吹き出し

た。モノとしては、ありのままを説明しただけなのだが……しかし、何はともあれ、ミライの笑顔を見ることができた。すると途端に、モノの全身を覆っていた緊張が解れ、同時に、栓を抜いたシャンパンのように、あれこれと話題が溢れてきた。話せる……モノはしっかりとミライの目を見た。

「休憩もそろそろ良いだろう？ 始める。」

ブラックキングの声がかかる。やっと……やっと、ミライと打ち解けられたというのに……モノは恨めしそうに彼の方を見た。しかし、ブラックキングの頑とした態度が揺らぐことはない。

「始める。」

低い声で、ブラックキングはもう一度言った。せめて、あと五分で良い……モノはミライとの会話の時間を求めようとした。しかし、その隣でミライはゴロンと横になり、その体をベッドに埋める。

「始めましょう。」

ミライの言葉に、モノは渋々、ブラックキングの言うことを聞くことにした……

始めたところで、モノは異変に気が付いた。ここに来て何人もの女を抱いた……しかし、ミライはそのどの女とも違った。そっと抱きしめた彼女の体は、ほんのりと冷たかったのだ。そして、まだモノを受け入れる準備も出来ていない……普通、繁殖牝人達は種付けの前に、ある程度前戯を施され、興奮状態に置かれる。種牡人に余計な負担をかけないためだ。しかし、ミライは違った。造り立ての氷の像のように、一点の乱れもない透き通った輝きを放っていた。「どうも、鈍い女でな……なかなか興奮しない……まあ、どうせこの女で最後だし、自分でやれ。」

停止したままのモノに向かって、ブラックキングは言った。見ると、ミライはまた無表情な顔に戻っていた。いや、その瞳は若干不

安そうか？ そんな彼女の目を見て、モノはそっと、彼女の唇に自分のそれを重ねた。むしろぶりつくのではなく、何も求めず、ただそっと、優しく……

「嫌だったら言って……やめるから。」

「ダメだったの。種付けなんだからな？」

「……少し、黙っててくれないか。」

モノはブラックキングから視線を戻すと、今度は彼女に覆いかぶさるような体勢になった。そして、震えるその体に、モノはまた優しく口付けをした。壊れてしまわないように、細心の注意を払いながら……すると、次第にミライの肌が紅く染まり始めた。肌に吸い付く度にピクツと反応し、軽く声を上げる……顔を上げると、彼女は目に涙を浮かべていた。

「もう……大丈夫……」

ミライの小さな声が聞こえた。それを聞くと、モノは手を彼女の脚の間に滑りこませてみる……どうやら、準備は出来たらしい……

「じゃあ、行くよ？」

ミライの内股に体を割り込ませると、モノは彼女の耳元で囁くように言った。彼女はそれに答えない。ただ涙を浮かべた目でモノのことを見ている。本当に、始めて良いのか？ モノはミライの真意を探ろうと、その潤んだ瞳を覗き込んだ……

「早くしろよ……」

「うるせえ奴だな……分かってるよ。」

しかし、ブラックキングが蹄を当てて急かしてくるので、仕方なくモノは始めることにした。そのままミライの中に沈んでいく……彼女の目からは大粒の涙がこぼれた。

行為の最中、彼女はずっと泣いていた……

続く

その日最後の女（後書き）

春工口を書き終えたら、俺……結婚するんだ。

相手はいませんがね……

老女ラーダの房

房の窓からは、月の明かりが差し込んでいた。モノはベッドの上に座りこんで、ボーっとそれを眺めていた。月の白い光の中に、浮かんで来るのはミライの姿……無表情で、自分の膝小僧を眺めていた彼女……モノの言葉にクスツと笑った彼女……綺麗な黒い髪を乱しながら、白いシーツを両手で握り締め、身をよじらせていた彼女……そして、その最中ずつと泣いていた彼女……

「モノ……」

ぼんやりと考え込んでいるモノの後ろから、リデルは声をかけた。モノはゆっくり振り返る。

「何だ？」

「モノ……何を悩んでるんだ？」

リデルが聞くと、モノは目を大きく見開いた。

「晩飯の時もそうだったが、やけに静かじゃないか……何かあったのか？」

「ん？ うん……まあな……」

モノはまた、窓の外の方を見た。リデルも一緒に、それを見上げる……少し形が悪い。満月まで、もう二・三日と言ったところだろう……

「今日、最後に抱いた女がな……」

モノは月を見たまま口を開いた。リデルは一瞬、チラリとモノの方を見たが、しかし、またその視線を月に戻した。

「ミライって言う名前だな……」

「ほう……」

「何て言うか、不思議な子だった……今にも壊れてしまいそうで、それで……泣いていたよ……」

「そうか……」

二人はまた、黙って月を眺めた。静かな月夜……わずかに、風が

草木を揺らす音が遠くに聞こえるだけだった。

「……惚れたのか？」

「ん、なにい！？」

突然の言葉に、モノは驚いて、体ごとリデルの方を振り返った。

リデルはまだ、月を見ている……

「そのミライって子のことを考えているんだろう？　好きになったのか、その子のことが？」

急に、モノの鼓動が高鳴った。そして、天から降ってきたかのように、あの時の感覚が戻ってくる……やんわりと弾力のある唇……スベスベとした肌……その腕の中で悶える彼女の動き、一つ一つが……そしてそれはこれまで、他の女、繁殖牝人達に感じてきた感情とは少し違うものだった。熱く、そそり立つような情欲ではなく……もつと、心の底から静かに、それでいて力強く沸き立つような……そんな感情だった。

「一人の種牝人が、一人の繁殖牝人に惚れたか……難儀な話だな……」

リデルは静かに、所々かすれるような声で言った。

「種牝人は、色んな女を抱くことができる。だが、色んな女を抱かなくてはならない……」

「分かっている……だけど、俺は……」

「さてな……」

小さく溜息をつくりデル……モノは視線を落として、ベッドの上に浮き彫りにされた自分の影を見ている。リデルは、そんなモノを見ると、また溜息をついた。

「それなら、ラーダの所に行ってみたらどうだ？」

「ラーダ？」

モノはゆっくり顔を上げると、リデルの方を見た……

リデルの話では、ラーダと言うのはこの牧場で最年長の、年老いた繁殖牝人らしい。もっとも、とくに繁殖の仕事は引退し、今は

「功勞人として余生を送っているらしいが……」きつと、相談に乗ってくれる」とリデルが言うので、モノはさっそく、少し離れた彼女の房を尋ねることにした。牝人用の厩舎を出て、月明かりに照らされながらしばらく歩くと、彼女のいる牝人用の厩舎に着く。ラーダがいるのは、厩舎の一番奥……モノはリデルに教えてもらった通りに進んだ。

「良い月夜だったのに……随分とまあ、浮かないねえ……」

あと数歩でラーダの房という所で、モノは突然、しわがれた声を耳にした。どうやら、その声は目的の房から聞こえてきたものらしい……

「何ぼけつと突っ立ってるんだい？ 相談があんだろ？」

声に急かされて、モノは止めていた歩みを進め、そして房の中を見た。大きなベッド……その上に、ばさつと白髪を生やしたわくちやの老婆が座っていた。

「まだ姿も見せてなかったのに、何で俺のことが分かった？」

「へっへっ！ こんな夜更けに、このババアを尋ねて来るのは『相談がある奴』って決まってるのさ……それで？ あんた名前は？」

「モノ……」

「モノか……へっへっ！ モノ……それで、何の相談に来たんだい？」

深く落ち窪んだ目をギョロツと光らせると、ラーダは聞いてきたと、同時に、来ていた服を脱いで裸になり、脚を大きく開き、その股間を惜しげもなくモノの前に晒してみせた……

「何のマネだ……ババア……？」

月に照らされて、鈍い光を反射しているそれを見ると、モノは聞いた。ラーダはニヤニヤしながら手招きをしている。

「やだねえ、鈍い男だよ！ 女がこんな格好してるんだから、そりゃあ『抱いとくれ』って意味に決まってるじゃないか。」

モノは啞然とした。どうにも、目の前の老婆の言うことが理解できない……

「……相談に乗ってくれるんじゃないかったのか？」

「へっへっ！ 堅苦しい話はやりながら聞くよ。ほれ、モノ！ かも〜ん！ うっふ〜ん……」

「ナメんな、ババア！」

ついに、モノは激怒して、腹の底から怒鳴り声を上げた。しかし、ラーダはそんなモノの態度を見ると、ゴロンと転がって彼に背を向けてしまった。

「ふん、なんだい！ ババアも抱かずに相談に乗ってもらえるとでも思ってたのかい？ 図々しいね、最近の若いのは……」

「いや、別に礼をしないとは……ただ、何だ？ その、何か別のことでだな……」

弁解しようとするモノ。しかし、その前で、ラーダはグーグーと寝息を立て始めてしまった。どうやら、選択肢は二つしかないらしい。相談を諦めるのか？ それとも、ラーダを抱くのか？ 物凄く悩んだが……しかし、最後にモノの脳裏をかすめたのはミライの涙だった。

「分かったよ……その代わり、相談にはしっかり乗ってくれよ。」

「へっへっ！ 最初からそう言えば良いんだよ……かも〜ん！ あは〜ん……」

「うざい……」

……しわくちやの体を抱きながら、モノは全てを話した。今日あったこと。ミライのこと……ラーダは、話をするモノの口に自分の舌をねじ込んだり、そして、大きく身をよじらせたりしながら……果たして、聞いていたのだろうか？ モノが何を話しても、ラーダから返ってくるのは、ムクドリの鳴き声のような喘ぎだけだった……うざい……

そして、ことは済んだ……ラーダは荒くなった息を整えている。

「へっへっ！　こんなに熱くなったのは久しぶりだよ……」

「……いい加減、真面目に相談に乗ってくれないか？」

ベッドに横たわったままのしわだらけの体を見下ろすと、モノは溜息をついた。そもそも、ちゃんと話を聞いていたのかすら怪しい

……

「そうさねえ……」

しかし、モノの不安をよそに、ラーダは真面目な顔つきになると口を開いた。

「あたしもババアなりに、もう何十年も生きたからね……実はあんたみたいな奴を、これまでに何人も見てきたよ……」

ラーダの目は、どこか遠くを見つめているようだった……

「だけど、所詮、種牡人と繁殖牝人が一緒になれるのは種付けの時だけ……ほとんどの奴は諦めたよ……運が良ければ、繁殖期にまた会えるかもしれないしね……」

「……『ほとんどの奴』って言ったな？　それ以外はどうしたんだよ？」

「へっへっ！　女を諦めるつもりはないようだね……」

ラーダはモノの顔を見ると、ニヤリと笑ってみせた。そして、続けた……

「牧場を、脱走したよ。『女と一緒になる』って言ってね……」

「脱走……それで？　そいつらは今、どうしている？」

モノが聞くと、ラーダは深く溜息をつき、そして首を横に振った。「分からない……」

女のいる牧場で捕まって処分されたかもしれないし、無事に逃げられたとしても、野生のヒューマンは自分の力だけで生きて行かなくてはならない……どこかで幸せにやっているかもしれないし、あるいは、野垂死んでいるかもしれない……牧場で、馬達に管理されながら生きている者に、その行く末を知る術はなかった。

「それでも……ミライと一緒にいたいのかい？」

ラーダはモノの目を覗きこんで聞いた。モノは考える……逃げ出

せば、自分は種牡人ではなくなる。代わる代わる体を重ねあつた女達との一時も、日に三回出されるちゃんとした食事も、全てを失う……その代わり、自由を、ミライを手に入れることができる……モノは頭の中に天秤を組み立てて、左の器にセックスと食事、右の器にミライを乗せた。そして、それを静かに見守る……グラグラと揺れ動いて、そして天秤は傾いた……

「ミライは、どこの牧場にいるのかな？」

モノはラーダの目を真っ直ぐに見て聞いた。

「結論が出たようだね……生憎、あたしはそのミライって子を知らないからね……他の牝人達なら知ってるかもしれないけど……」

そう言つと、ラーダは自分の房から首を出した。

「おい！ 誰か、『ミライ』って子がどこの牧場の牝人なのか知らないかね！」

厩舎内に、ラーダの低くしわがれた声が響き渡った。

続く

老女リーダーの房（後書き）

ファンキーなお婆さんって良いですよね。

性的な意味じゃないですよ？

月下の脱走

牡人用の厩舎に戻ってきたモノは、自分の房ではなく、リデルの房に入った。自分の房にあるのはベッドだけ。所持品も無い。もう、戻る必要もない……

「どうした、モノ？ ラーダには相談に乗ってもらえたのか？」

神妙な面持ちでやって来たモノを見ると、リデルは尋ねた。すると、モノは改まった態度で話を始めた。

「牧場を、出ることにした……」

リデルは眉をピクリと動かした。そして、黙ったまま、「話を続けるように」とモノに視線を送る。それを見ると、モノは一呼吸置いて、そしてゆっくりと口を開いた。

「ミライのいる牧場を教えてもらった。ここから、そう遠くない。

俺はもう、すぐに彼女の所に行こうと思う。だから、短い間だったけど、話したり、一緒に飯を食ったりした仲だから、お前に挨拶だけしとこうと思ってな……」

「急な話だな……」

モノの話が終わると、リデルは静かに目を閉じ、そして溜息をついた。

「しかしな、モノ……牧場を出るって言っても、ブラックキングが許してはくれまい……」

「そんなことは分かっている。だから、脱走するのさ。」

「どうやって？」

牧場は、内部での移動は割りと自由にできるが、しかし、内から外に出るには一苦労だ。牧場の敷地の外周は、電気の流れる有刺鉄線で囲まれている。触れた程度で死にはしないが、しかし、それを乗り越えようとすれば話は別だ。有刺鉄線が無い所も、あることにはあるが、しかし、そこには監視小屋があり、出入りする者は、監視小屋の前を通らなくてはならない。モノが出ようとすれば、その

中に控えている馬に見つかってしまっただろう……リデルは、その事をモノに説明した。

「そうだったのか……くそ、何とか出られねえかな……」

ラーダに、脱走した男のことをもっと詳しく聞くべきだった……モノは舌打ちをした。しかし、苦い顔をしているモノを見ると、何を思ったか、リデルは突然立ち上がった。

「何なら、俺も一緒に行って手伝ってやろうか？」

「何だって？」

思わず、モノは聞き返した。リデルは、外に出る仕度をしながら続ける。

「俺は何度も脱走したことがあるからな……ここを抜け出す術は心得ている。任せてくれ……」

「リデル、お前は……」

「話は後だ。そろそろ、時間だからな……すぐにでも行きたいんだろ？ 彼女の牧場へ……」

リデルはそう言うと、房を出た。モノもその後続く。聞きたいことは山ほどあったが、しかし、リデルが「牧場を出たら」と言うので、モノは黙って、彼の後を付いていった。どうも、牧場を抜け出すには時間が関係あるらしい……

しばらくして、モノとリデルは、監視小屋の近くの草陰に隠れていた。監視小屋には大きな窓があり、ガラス窓の向こう側では馬が目を光らせている。やはり、通り抜けることはできない……モノがそんなことを考えていたその隣で、しかし、リデルは小屋とは別の方を見ていた。

「来たぞ……！」

突然、リデルは小声で言うと、「もっと頭を下げろ」と、モノの頭に手をあてて草の中に押しこんだ。すると、その数秒後、軽快な蹄の音が響き渡り、一頭の馬が二人の前を通りすぎていった。

「交代の時間だぞ。」

「ああ、お疲れ……」

馬は監視小屋に入ると、そこにいたもう一頭の馬と談笑を始めた。ほんの一・二分程度……二頭は面倒な当直業務の合間の、ささやかな憩いの時を楽しむ。しかし、リデルはその隙を見逃さなかった。

「行くぞ……！」

そう言っただけで立ち上がると、リデルはモノの腕を引いて、できる限り音を立てないように、しかし、それでいて素早く監視小屋の前を通り抜けた。パツと、モノは後を振り返る。馬達は気付いていない……脱走に成功したのだ。

「奴ら、交代の時に必ず無駄話をするからな……」

リデルはそう言っただけでニヤリと笑った。

「それで、彼女のいる牧場までの道は分かっているのか？」

「ああ、種付けでそこに行ったことのある繁殖牝人に聞いたよ。」

「そうか……」

牧場が後の方に、小さく見える。二人は、パタパタと足音を立てて走り始めた。見上げると、月はやや西に傾き始めていた。その光が所々に浮かぶ雲にあたり、空全体に白と黒の美しい模様を写し出している。明るく、静かな夜だった。脱走のドキドキも手伝い、モノは弾むように走った。

そして、一時間ほどすると、二人はついにそこに辿り着いた。目の前には、有刺鉄線がある。おそらく電気も通っているだろう……そこはミライのいる牧場だった。さて、中に入るにはどうすれば良いか？ 二人は考えながら、有刺鉄線の柵に沿って歩き始めた。すると、この牧場も同じらしい……二人は監視小屋を見つけた。

「まったく、無用心だな……」

小屋の中を見ると、馬は居眠りをしていた。しかし、モノにとっては好都合。隙を待たずに牧場内に忍びこむことができる……

「俺は外で待っている。モノ、行って来い……」

モノが柵の内側に入ろうとすると、リデルは言った。

「来ねえのか？」

「ああ、俺がいつも脱走するのは、柵の内側じゃない、自由な世界を散歩したいからだ。せつかく脱走したのに、柵の内側に入るのはごめんだ……」

リデルがそう言うので仕方なく、モノは一人、牧場の中に歩みを進めた。目指すはミライの房……牝人用の厩舎を探して、モノは牧場の中を進んでいった。幸い、馬の姿は見当たらない。監視小屋の馬だけでなく、この牧場の管理自体が不真面目らしい……おかげで、モノは簡単に、目的の建物を見つけることができた。

中に入ると、たくさんの房が目に入った。SDSと違って、この牧場はかなりの数の繁殖牝人がいるらしい。彼女のいる房を見つけるには、少し時間がかかりそうだ……ふと、モノはそんなことを考えた。しかし、その時だった……

「あれ？ あなたは……」

後から、突然の声……モノは驚いて振り返った。

「やっぱり、モノじゃないの！ どうしたの？」

そこにいたのは、モノが種牝人になって二日目に抱いた、元レスリング選手の繁殖牝人だった。今日はＴシャツを着ているが、それでも、しかしその上からでもガタイの良さが分かる。女とは言え、モノより太いその腕に捕まえられたら、きつと逃げることはできないだろう……モノはゴクリと生唾を呑みこんだ。しかし、そんなモノとは裏腹に、彼女は笑顔だった。

「あなたはSDSの種牝人でしょ？ まさか、抜け出して来たの？」
驚いているようだったが、しかし、モノをどうしようという気はないらしい……その笑顔を見て、モノはほっと胸を撫で下ろした。

「ちょうど良い。『ミライ』って名前の繁殖牝人がここにいるだろう？」

安心したところで、モノはついではかりに聞いてみた。

「ああ、ミライちゃんね。いるけど？」

「房の場所を教えて欲しいんだ……」

モノが聞くと、彼女は一瞬目を丸くしたが、しかし、快くミライの房の場所を覚えてくれた。モノはお礼を言っていると、その房に向かって速足で歩いた。ドクドクと、心臓が激しく暴れ始める。もうすぐ、彼女に会える……彼女と知り合って、まだ一日も経っていないのに、しかし、モノにはもう十年以上会っていないように感じられた。そんな彼女に、もうすぐ会える、もうすぐ……

続く

月下の脱走（後書き）

今回はエロくないな……

愛した人

まず、何と言葉をかけたら良いか？ モノは考えた……映画で見たような、小洒落た挨拶をするか……それとも、いきなり唇を奪ってしまうのも……と、あれこれ考えたが、下手なことをして、ミライを白けさせてもいけないと思い直し、結局、シンプルに伝えるべきことを、自分の気持ちを正直に伝えることにした。「一緒に来て欲しい」と……

さて、結論が出た。と、それと同時に、モノはついにミライの房の前までやってきた。胸が一段と高鳴り、膝がガクガクと震える……モノは深呼吸を何度か繰り返した。そして、落ち着きを取り戻すと、モノはミライの房を覗き込んだ。

……

しかし、モノはすぐに顔を戻してしまった。驚いたから……にわかに信じ難い光景だったが、しかし、確かに、そこには人影が二つあった。一つはミライのもの。さて、もう一つは……？

「SDSに、行ってきたわ……」

モノが考えていると、房の中からミライの声が聞こえてきた。モノは、感覚を研ぎ澄まして、その言葉を拾おうとする。

「行ってきたわ……種付けに……」

「そう……」

モノの耳は、ミライの言葉に返事をした『もう一人』の声を聞いた。それは、低い……男の声だった……

「ねえ、ジョー……怒ってる？」

「いや、君は繁殖牝人なんだし、牧場の決めた相手の子を産むのは当然さ。仕方ないよ……」

「うそ！ そんなこと、ちっとも思っていないくせに！」

ミライの声が響き渡った。モノと話していた時には出したことのないような、感情豊かな大声が……

「小さい時にした約束、覚えてる？ 大人になったら、二人で牧場を出て、どこかで二人だけで暮らそうって……言ってくれたよね、ジョー？」

「覚えてるさ……でも、あの時の僕は何も分かって無かったのさ。現実が見えてなかったのさ……」

ジョーの静かな言葉に、ミライのすすり泣く声が重なった。それを聞くとモノは堪らず、ミライの房の中をそーっと覗いた。ミライは顔を両手で覆って泣いている。ジョーの腕に包まれながら……

「ごめん……僕が、もっと立派な種牡人だったら……」

「うつん、ジョーのせいじゃないよ……ごめん、馬鹿みたいなこと言って……」

ミライはジョーの胸に体を預けながら言った。その言葉を聞きながら、ジョーは優しく、彼女の髪を撫でている。そんな光景を、モノは息を殺して見つめていた。体から血の気が引いていく。その代わり目頭が熱くなって、体が震えて、頭の中が真っ白になる……それでも、モノは黙って見ているしかなかった。

「ねえ、ジョー……」

「ん？」

「抱いて……」

ミライはジョーの首に腕をまわすと、そのままベッドに倒れこんだ。

「このままだと、私はずっとただの繁殖牝人よ？ あなたのものじゃない、牧場の所有する一人の繁殖牝人……」

ミライはそっと、ジョーと唇を重ねた。そして……

「せめて、あなたのものにして。」

モノの目の前で……二人は気がついていないが、モノの目の前で、二人は着ていた服を脱ぎ去ると、もう一度激しく唇を重ねた。そして、抱き合い、絡み合い、何度も唾液を交換しながら、ベッドの上

を転げる。聞こえてくる、様々な音と喘ぎ……目の前で、自分以外の男に抱かれるミライの顔は、時折快感に歪むも、笑顔だった……幸せそうな、笑顔だった……モノが彼女を抱いたとき、ミライはずっと泣いていた。しかし、今、ジョーに抱かれている彼女は笑顔……モノはその時、ついに悟った。彼女の涙の理由……ジョー以外の、好きでもない男に抱かれていたから泣いていたのだ……

「ジョー、お願い……来て……」

その時、ミライは起き上がると、再びジョーの首に腕をまわして、そして彼の膝の上に腰を下ろした。

「ミライ、愛してる……」

「私も……」

ミライはそのまま体をジョーに重ね、そして、二人の腰がぴったりとくっつく……

「く……ちくしょう……」

モノは悔しかった。ミライの心が分からなかった自分が……そんな自分の前で、体をぶつけ合っている二人が……そして、ジョーの腕にしっかりと抱きしめられながら、幸せそうに声を上げている彼女の姿に、激しく反応している自分の体が……

「ちくしょう……」

いきり立つ自分の体を手で押さえつけながら、モノは涙を流した。それでも、彼の体は金縛りにあったように硬直し、愛し合う二人から目を逸らすことができない。月光が映し出す二人のシルエット……それは激しく揺れ動いている。

「ジョー……もう……」

ミライはジョーの目をジッと見つめた。二人の視線が交じり合い、口は開いていないが、まるで会話をしているようだった。二人の想いが通じ合っていた……しかし、モノには分からなかった。

「ミライ……!」

二人はもう一度、唇を重ねた……そして、そのまま動かなくなる。その瞬間、ジョーの全てが、ミライの中に注ぎこまれたのだ。

「嬉しい……」

ミライは泣いていた……その涙の理由は、今度は、モノにも分かった……

監視小屋の馬はまだ、気持ち良さそうに眠っていた。その様子を見ながら、リデルはモノが出てくるのを待っていた。あれから、もうどれぐらいの時間が経っただろう？ 女一人を連れ出すには、やけに遅い……心配になって、リデルは牧場の方を見た。すると、暗がりの中に、何か動くものが見えた。良く見ると、それはモノだった。

「遅かったな……」

リデルはモノに駆け寄った。モノからの返事はない……

「どうした？ ミライは？」

それでも、モノは何も答えなかった。ただ黙って、監視小屋の前を通り過ぎ、柵の外に出る。

「帰ろう…… SDS に……」

モノはフツと微笑を浮かべると、それだけ言って、後は黙って歩いた。ただ、歩いた……牧場の中で、モノに何があったのか、リデルに詳しいことは分からなかったが、しかし、リデルも何も聞かず、ただ、黙って歩いた……

来た時とは違い、帰り道の足は重かった。月が大分西に傾いて、真っ黒だった空の色も、やや青くなってきた。その下を、二人はとぼとぼと SDS に向かって歩いて歩いた。そして、明けの明星が輝き始めた頃、二人はようやくと SDS に到着した。トイレにでも行っているのか、監視小屋には馬がいなかった……

モノは溜息をつく、牧場に入ってしまった。もう、戻らないと決めたはずの、柵の中へ……

続く

愛した人（後書き）

以前、私が失恋した時、親友が私に言いました。

「大丈夫だ、彼女はちゃんと他の男の　　でヒューヒュー言ってるから！」

……我ながら凄まじい親友を持つたと思います。

道

モノは激しく体を揺さぶった。目の前では、女が「ヒーヒー」と声を上げている。種付けが始まってから、まだそれほど経っていない。にも関わらず、女はそのあまりの激しさに、既に何度も達していた。

「激しい……！ ダメ、壊れる……！」

女はあっちへこっちへと体を曲げたり伸ばしたり……必死に快感から逃れようとする。しかし、モノの腕がしつかりと女の体を押さえつけているので、それは叶わなかった。

「やだあ！ もう無理だつてば！」

泣き叫びながら、また達する……それでも、モノの動きは止まらなかった。叫ぶ女の口に舌をねじ込み、また激しく体を揺らして女を責めたてる。

「やめてつてば……やめてよお……」

また押し寄せてくる快感……女は涙を流しながらモノを見た。しかし、その声はモノには届かない。モノの頭の中は、もう一杯だった。女の言葉が入りこめるスペースなど空いていなかった。

ミライのことがあってから、モノはずっとこの調子だった。朝、目が覚めると頭の中にモヤモヤとした霧がかかっているのだ。それは言いようのない悔しさであり、虚しさであり、悲しさだった。それが頭の中に充満すると、胸が痛むようになり、そして、次第に体全体がだるくなる……厄介な病だった。治す術は一つしかない。忘れることだ。ミライを忘れるしかない……だから、モノは代わる代わるやって来る女達を遮二無二抱いた。骨の髄まで、貪るように……

「やめて……とめて……やめて……とめて……」

その激しさに耐え切れず、女は快樂の中で真っ白になってしまう。「やめ……」

女が気を失う。それと同時に、モノは自分の中に溜まったモヤモ

やを、全て女の中にぶちまけた。そして、フーと溜息をつく、女を開放して立ち上がった。

「お前は、鬼か……？」

タオルを渡しながら、ブラックキングは呆れて言った。目の前では、女がビクビクと痙攣しながら、モノが注ぎ込んだモヤモヤを垂れ流しにしている……

「まったく、少しは手加減してやれよ……」

ブラックキングは溜息をついた。彼としては、牧場の業務として種さえ付けてくれればそれで良いのだが、しかし、目の前で行われているそれはまるでレイプだ。さすがのブラックキングも、こんなものを立て続けに見せられては気が滅入る……しかし、モノは何も言わず、黙ったままスタミナドリンクを飲んでいる。一体、何があったのやら……ブラックキングが考えているうちに、モノは回復したのか、次のベッドに向かって立ち上がった。

「やめてえー！」

数分後、また女の悲鳴が響き渡った……

日は沈み、夕食の時間になった。房に帰ってきて、そのままベッドで眠ってしまっていたモノは、夕食の匂いに誘われて目を覚ました。

「カレーか……」

匂いから判断すると、モノはベッドから起き上がり、そして夕食をもらいにいった。手にしたカレーは二皿。モノの分と、そしてリデルの分だった。

「おい、リデル。飯食おうぜ。」

そう言つて、モノはリデルの房を覗き込んだ。しかし、リデルはいなかった……

「ありゃ？ 入れ違いになったかな……」

しかし、良く考えて見ると、リデルが食事を取りにいこうとすれば、どこかでモノとすれ違はずだった。

「トイレかな……？」

そのうち来るだろう……モノはそう考えると、リデルの分のカレーを脇に置いて、先に食べ始めた。しかし、皿が空になってもリデルは帰ってこなかった。カレーが冷めてしまう……そんな心配をしながら、それでも、そのままの時間が流れていった。カレーが完全に冷え、表面に幕が張っても……

「何かあったのかな？」

いくら待っても帰って来ないリデル……モノは心配になって、厩舎を出ると、牧場の事務室に向かった。今日は、ブラックキングが当直勤務に当たっているはずだ……

「ん？　おい、明日も種付けがあるんだから、あまり夜更かしするなよ……」

事務室にやって来たモノを見ると、ブラックキングは言った。

「聞きてえことがあんだよ……リデルが戻ってこねえんだけど？」

モノに背を向けて事務仕事をしていたブラックキングだったが、しかし、『リデル』と言う名前を聞くとピタリと止まった。

「リデルはどうしたんだ？」

「リデル……そうか、お前達は房が隣同士だったな……」

振り返ると、ブラックキングはそう呟いた。そして、そのまま黙りこんだ……モノの目をジッと見たまま……しかし、溜息と一緒に口を開いた。

「死んだよ……」

「なんだって!？」

モノは聞き返した。ブラックキングは、モノと目を合わせないように、窓の外を見て話を続けた。

「種付けの最中にな、急に胸を押さえて苦しみだして……病院に運ばれたんだが、手遅れでな……」

モノは……何も言うことができなかった……

「我々も、ヒューマンの健康管理には気を遣っているのだが……リデル、あの男は如何せん、元々の顔色が悪いからな……お前も具

合の悪いときは、無理をせずにそう言ってくれよ?」

話を終えると、ブラックキングは「早く寝ろ」と言ってモノを事務室から追い出した。しかし、モノの頭は真つ白だった。種付けの前、朝食と一緒に食べたときは普通だったのに……隣人の突然の死に、モノはどうして良いか分からなくなってしまった。ただ、とにかく、歩いていた……

「おや、モノじゃないかい……」

自分の房の場所も分からないくらいに混乱していたのか、気がつくくと、モノはラーダの元にやって来ていた。

「へっへっ! 相談かい?」

ラーダは聞いたが、モノはうつむいたまま動かない……

「どうしたい? 何とか言ったらどうだい?」

「悪い、ばあさん……今日は、ばあさんを抱く気にはなれねえんだ……」

「んなこたあ分かってるよ。」

ラーダの言葉に、モノはパツと顔を上げた。ベッドの上に、ラーダは優しく微笑みながら座っている。

「話してみな。いくらでも聞いてやるよ……」

モノは話した、リデルのことを……ミライのことを……もう、何もかもが分からなくなってしまったことを……ラーダは、目を閉じて、静かに聞いていた。

「どうしたら良い? この訳の分かんねえ苦しみから逃れるには、どうしたら良い? ミライのことも、リデルのことも、忘れるにはどうしたら良い? 女を抱いても、抱いても、苦しくて仕方ないんだ……」

胸の中の全てを吐き出すと、モノはそれきり黙ってしまった。始めて房を尋ねて来た時よりひどく小さくなってしまったその男を、

ラーダは優しく撫でながら、そして口を開いた。

「種付けっていうのは、大変なものさ……それこそ、一人が不幸になっても、命を落としてもおかしくはない。残酷な話さ……」

モノはラーダを見た。ラーダもモノを見ている……

「それでも、こっち側を望んだんだろ、モノ？」

「え……？」

「女を嫌ほど抱ける仕事……でも、それはこういう仕事なんだよ……」

モノは、あの日のことを思い出した。牧場の仕事にうんざりしていた、あの日のことを……

「モノ、あんたは全部背負っていかなきゃならない……ミライも、リデルも、全部を背負って、これからずっと……それが、あんたの望んだ道、そしてこれから進まなくてはいけない道なんだよ……」

その夜、モノはずっと泣いた。泣き疲れて眠るまで……そんなモノを、ラーダはただ見守っていた。

続く

十字架

モノは何も考えない。朝起きて、出てきた食事をただ口に運んで、種付けに行つて、左のベッドの女から順々に種付けしていく。女の顔は見ない。声も聞かない。湿った女の体の中に、自分をねじ込んで出すものだけ出す。終わったら房に戻つて、また出てきた食事をただ口に運んで、ベッドに入つて寝る。ここにいる限り、やるべきことはこれの繰り返しだ。だから、モノは何も考えない。インプットした行動を体が勝手に実行してくれる。だから、モノは何も考えない。モノの頭は、きつとミライを、リデルを忘れることはできないだろう……ラーダが言うように、それはずっと背負つていかなくてはならない十字架なのだろう……ひどく重い十字架……それならば、重いと感じる感情なんていらぬ。そう思ったから、モノは何も考えない……

「モノ、種付けに行くぞ。」

今日もブラックキングが呼びに来た。いつも通りだ。モノの体は、インプットされたプログラムを実行する。ブラックキングの後に付いて歩き、種付け用の部屋についたら、左のベッドから順に種付けしていけば良い……一言も発せず、モノは厩舎を出た。

「おっと、そうだった……」

しかし、ブラックキングのこの一言から、状況は変わった。

「お前に紹介してなかったな。今日からこの牧場で働くことになった新入りのアークレイだ。」

「ちーっす……」

目の前には栗毛の若い馬がいた。

『新入りの馬を紹介される』

インプットされていない……エラーが生じたので、モノは仕方な

く頭を起動させた。同時に、ミライとリデルの声が降ってくる……モノは胸が締めつけられるような感覚に襲われた。

「まだ研修中だから、今日は俺と一緒に前回の補助をする。まあ、お前のやることはいつもと変わらんがな……」

ブラックキングが言うところ、リデルは脳のシャットダウンの準備を始めた。突然紹介するので、何のことかと思ったが、やることが変わらないならそれで良かった。重さを感じずに、プログラム通りに動けば良いのだから……モノは再び思考を停止して、ブラックキングの後に続いた。その後を、アークレイもたらたらと気だるそうに歩いた。

そして、種付けが始まった。

「ねえ、胸も一緒に責めて。そうすると、気持ち良いの……」

女がリクエストする。しかし、モノは女の腰に沿えた手を動かすことも、口で膨らみにむしゃぶりつくこともしなかった。女の言葉を聞くには頭を使わないといけないから……モノはただ、黙って腰を動かし続けた。

「ねえ、胸を……」

最後まで、モノは女に応えることはなかった。達しないままの女の中に、出すものだけ出すと、そのまま立ち上がって休憩用の椅子の所に向かった。プログラム通り……この後は、ブラックキングの持つてくるスタミナドリンクを受け取って飲み、休憩の後、次の女と性交をする……

「よお、ダメじゃんかよ、自分だけイッちゃあ……」

しかし、スタミナドリンクを持ってきたのはアークレイだった。ふと、浮かぶ疑問……

「ブラックキングはどこだ？」

頭を働かせてしまった……苦しい……

「先輩なら、『見てるだけならできるだろ？』って言ってどっか行っちゃったぜ。安心しろよ。俺がしっかり見てやるからよ……ひ

「やっひやっひやっ！」

アークレイの下品な笑い声を聞きながら、モノはまた脳のシャツトダウンに取りかかった。何のことはない……ブラックキングがこの下品な新入りに代わっただけのこと……モノはスタミナドリンクを一気に飲み干すと、そのまま次のベッドに向かった。プログラム通りに……女と性交して……出すものを出すだけで良い……

「ほらほら！ もっと気持ち良くしてあげなきゃ！」

耳元で声がしたので、モノは思わず振り返った。直ぐ目の前にアークレイの顔がある。

「うるさい！ あっち行つてろ！」

「けっ！ 何だよ、アドバイスしてやってんだろ？」

痛む胸を押さえながら、モノは必死にプログラム通りの動きを実行しようとする、しかし、その度にアークレイの下品な笑い声がそれを邪魔した。シャツトダウンをする暇もない……なのに、苦しみだけは容赦なく襲ってくる。

「まったく、羨ましいね。お前らは女抱いてりやそれで良いんだからな……俺も種牡人になりてえぜ。」

馬鹿な、全然羨ましいことなんかない……モノは必死に体を揺さぶった。

「お！ 調子出てきたじゃん！ ひやっひやっひやっ！ 良いぞ、良いぞ……！」

モノの頭の中を、種牡人になってからのことが走馬灯のように駆け巡った。それでも、次の瞬間、それらは津波のようなアークレイの笑い声に押し流されていく。笑うな……モノはそれを振り払うようにその動きを激しくする。

「ほら、分かるか！ 女、感じすぎてヒーヒー言ってるぞ！ ひやっひやっひやっひやっひやっひやっ！」

笑うな……笑うな……

「ひやっひやっひやっひやっひやっひやっ！」

笑うな……

……
いつの間に眠ってしまったのだろうか？ モノは種付け用のベッドではない、自分のベッドで目を覚ました。すぐ横では、目覚まし時計が怒鳴り声を上げている。モノはその頭を叩いて黙らせると、そのまま手に取って時間を確認した。

「ん？ 目覚まし時計！？」

モノは飛び上がるように体を起した。手に持っているのは、確かに目覚まし時計だった。房にはこんなものなかったはずだが……

「俺の……部屋……？」

周りを見ると、そこは『モノの房』ではなかった。少し黄ばんだ壁紙、使い慣れた家具達、散乱した衣服、見たまま出しっぱなしのアダルトDVD……間違いなく、そこは『モノの部屋』だった。

「夢……だったのか……？」

ひどく長くて、生々しい夢だった……モノはとりあえず、寝汗でびっしょりになった体をシャワーで流すことにした。パシャパシャという水音を聞きながら、ゆっくり考える。ミライのこと、リデルのこと……胸が痛む……しかし、夢だとしたら……

風呂場を出て、体を拭いた頃には、モノの胸の痛みは無くなっていた。夢の世界の住人の死に、いつまでも胸を痛めていることなど、馬鹿馬鹿しくて彼には到底ではしれない。

「やべ！ シャワー浴びてたら時間無くなっちゃったよ！」

モノはパンと牛乳を口に押し込むと家を出た。自転車に跨って、SDSに向かう……

その日は、またブラックキングの種付けが待っていた。ブラックキングを馬房から出して、種付け用の場所まで連れて行く。そこには倉庫のような建物……中に入っても、もちろんベッドなどない。馬はベッドでセックスなどしないから当たり前だ。

そして、ブラックキングの種付けが始まった。モノはいつも通り、同僚達としゃべりながらその補助にあたった。

「おお！ 見るよモノ！ ひゃっひゃっひゃっ！」

ブラックキングは牝馬の中に自分の分身達を解き放つと、体を支えることが出来ずにそのまま倒れてしまった。

「俺も倒れるまでやりたいもんだ！ ひゃっひゃっひゃっ！」

同僚の男は腹を抱えて笑った。しかし、モノは笑えない……彼は倒れこんだブラックキングに歩み寄ると、そつと首を撫でてやった。「疲れたか？ 少し休憩しような……」

あれは夢だったのかもしれない。いや、夢だったのだろう……しかし、夢で終わらせるにはあまりにも大きすぎる夢だった。例えば、それがモノの眠っている間の、脳のちょっとした活動の残像だったのだとしても、モノはハッキリ覚えているのだ。種牡人になったこと……その腕に抱いた繁殖牝人達……ミライに恋をしたこと……リデルという親友と呼んでも良い男がいたこと……その男が種付けの最中命をおとしたこと……全部、覚えていた。

「夢で片付いたりしないさ……全部、忘れない……」

モノはラーダの言葉を思い出した。

「背負っていくさ……」

「どうしたよモノ、一人でブツブツ言ってる？ ひゃっひゃっひゃっ！」

「うるせえな……こいつらも大変なんだ！ まず、その下品な笑い方をやめろ。」

それからと言うものの、モノはずっとずっと、定年を迎えるまでSDSでの仕事にその身を捧げたという……

終わり

十字架（後書き）

ここまで読んで下さった皆様。

どうもありがとうございました。

モノはこれにて終了です。

思えば、連載を完結させたのってこれが初めてです。

作者としては完結というのは嬉しくもあり

また同時に寂しくもあるものですね……

願わくば、この話を皆様にも気に入って頂けたら光栄です。

さて、この小説は「春エロス2008」の企画に出した小説です。

下にあるリンクから春エロスのサイトにとべるので、是非、他の作品も読んでみて下さい。

そして、もしこの話が気に入って頂けたのであれば、投票してあげてください。

それでは、最後にもう一度……

御愛読、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8764d/>

モノ　～種馬になった男～

2010年10月8日15時30分発行